

氏 名	本家 淳子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	看護学
学位授与番号	博甲第7315号
学位授与の日付	令和7年 3月25日
学位授与の要件	保健学研究科 保健学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文の題目	Effect of perioperative physical activity on skeletal muscle loss 6 months after esophageal cancer surgery (食道癌術後6カ月の骨格筋減少における周術期身体活動の影響)
論文審査委員	相原 洋子 教授 小野 智美 教授 加澤 佳奈 教授

学位論文内容の要旨

筋肉量の減少により筋力と身体能力が低下した状態であるサルコペニアは、食道癌患者の予後に大きな影響を及ぼすことが知られている。今回、手術を受ける食道癌患者の周術期身体活動が術後6カ月の骨格筋量に及ぼす影響について検討した。対象は、食道切除術を受けた患者62名とした。身体活動の指標として、術前・術後の1日あたりの平均歩数を用いた。骨格筋量はSkeletal Muscle mass Index (SMI)の術前から術後6カ月の変化率を用いた。術後6カ月のSMI減少に関連する因子について多変量解析を用いて分析した。術後6カ月のSMI減少率中央値は-6.2%であった。多変量解析の結果、術後6カ月のSMI減少に関連する因子は、年齢 > 69歳、術前歩数 < 7,800歩/日、術後歩数 < 2,400歩/日であった。また、術前歩数と術後歩数は有意に相関していた。食道癌の手術を受ける患者では、周術期の歩数が少ないこと、高齢であることが術後の骨格筋減少の重要なリスク因子であることが明らかになった。周術期の歩数が少ない患者や高齢患者の場合、歩数を増やす介入によって骨格筋量の減少を防ぐ可能性が示唆された。

論文審査結果の要旨

本論文は食道癌手術を受けた患者を対象とし、術後6か月の骨格筋の減少に関連する要因を明らかにすることを目的とした、後方視的観察研究である。活動量計を用い、術前と術後3週間の歩数と骨格筋量の減少との関連を示したものであり、先行研究で述べられていた骨格筋量減少に関連する要因に、新たに追加される因子を明らかにした点において、博士課程後期の研究として評価できる。また活動量計を使い歩数を可視化することで、術前・術後の歩数の増加に良好な影響をもたらすことも、先行研究として明らかとしていた点も評価できる。

一方で、高齢者に多い疾患という特徴を踏まえ、本研究で得られた結果を看護実践に応用していくうえでは、患者の教育レベル、ヘルスリテラシー、併存疾患の有無といった背景との関連性も加えて分析をすることが求められる。